

34. 肝細胞癌の肝外転移診断における全身ガリウムシ ンチの有用性

小泉 義子	高田 恵二	福田 晴行	
田中 正博	松村 康正	岡村 光英	
谷口 脩二	福田 照男	越智 宏暢	
小野山靖人	池田 穂積	浜田 国雄	
(大阪市大・放)			
塩見 進	黒木 哲夫		(同・三内)
林 茂筆			(伊丹市民病院・放)

われわれは、過去5年間(昭和55年～60年)に全身Gaスキャンを施行した際、36例の肝細胞癌症例に遠隔転移を検出し、全身Gaスキャンが有用であったので報告した。36例の年齢は43歳～73歳(平均59.6歳)、性別は男性29例、女性7例である。転移部位は、骨20例、リンパ節10例、肺7例、胸膜壁4例、副腎3例であった。骨転移例について、各転移巣のGaスキャン像と骨スキャン像を比較すると、異常集積像の一致しない例が7例(9か所)みられた。骨スキャンでは、欠損像とその辺縁をふちどるような集積像として描出され、ガリウムはこの欠損部に一致して強く集積した。これらは腸骨、胸骨など扁平骨に多発していた。ガリウムの集積範囲が骨スキャンでの集積像より広く、骨外進展部をも描出した例もみられた。骨スキャンのみでは、欠損像は読影しにくく、骨外進展部の描出も不十分であり、全身Gaスキャンの併用が重要と思われる。少数例ながら、 ^{75}Se -セレンメチオニンによる陽性描画併用例(3例)と、Gaスキャンの比較では、Gaスキャンの方が、転移巣を明瞭に描出した。また、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -PMTによる陽性描画併用例(3例)では、Gaスキャンと同様かなり明瞭な転移巣が描出されたが、腰椎や骨盤への転移巣については、腸管へ排出されたアイソトープが障害となり、読影が困難な場合があった。

最近、シンチカメラの性能向上により、短時間で全身像を得られるようになっており、Gaスキャンの際、肝の陽性描画だけでなく遠隔転移を診断する上で、全身Gaスキャンは有用と思われた。

35. び慢性肝疾患における ^{67}Ga の肝集積

中野 俊一	長谷川義尚	井深啓次郎
橋詰 輝己	野口 敦司	
(大阪成人病セ・アイソトープ診)		

^{67}Ga は血中ではトランスフェリンと結合して運搬され、その肝、脾への分布は血清不飽和鉄結合能(UIBC)と関係が深いという動物実験の成績が報告されている。われわれは今回び慢性肝疾患について ^{67}Ga の肝へのとりこみとUIBCおよび肝機能検査成績との関係をしらべた。肝腫瘍の疑いで ^{67}Ga citrateと $^{99\text{m}}\text{Tc}$ 錫コロイドを用いて減算シンチグラフィを行った症例のうち、その他の検査およびその後の経過から腫瘍性病変が否定された。び慢性肝疾患57例についてしらべた。このうち17例は腹腔鏡および生検により慢性肝炎或は肝硬変と診断されたが、その他は臨床検査成績によるものである。

データ処理装置に収録された肝の ^{67}Ga シンチグラムの正面像を再生し、肝石葉上方および腹部で肝、脾、腎、大腸、骨を除く部分に関心領域を設け、両者の1画素あたりのカウント数の比(肝/腹部比)を算出した。

び慢性肝疾患57例のUIBCの平均値、標準偏差および範囲は $172 \pm 95 \mu\text{g/dl}$, $20 \sim 414 \mu\text{g/dl}$, ^{67}Ga の肝/腹部比はそれぞれ 2.11 ± 0.68 , $1.22 \sim 5.14$ と広い範囲に分布したが、両者の間には有意の相関がみとめられた($r=0.76$, $p<0.01$)。次に ^{67}Ga 注射の前後2週間以内に行われた肝機能検査のうち、GOT, GPT, アルブミン(%), ガンマグロブリン(%), ヘパプラスチンテスト、およびICGと ^{67}Ga の肝/腹部比の関係をしらべたが、いずれとの間にも有意の相関はみられなかった。すなわち、び慢性肝疾患においては肝機能障害の程度よりもUIBCの方が ^{67}Ga の肝へのとりこみに与える影響が大きいものと考えられる。